プロジェクト研究9　現代児童の生活実態に関する研究

親の養育態度と幼児の安全行動

研究第7部　高橋種昭・須永　進
研究第2部　斉藤幸子
研究第8部　星　美智子・湯川礼子
川島秀二（あかいとり幼稚園）
上甲千鶴子（淑徳幼稚園）
萩原英敏（淑徳短期大学）

要約：

親の養育態度と事故・けがの関係，子どもの性格・行動特性と事故の関係について都内A幼稚園，横浜市B幼稚園の園児265名を対象にその母親と幼稚園担任に質問紙より調査を行った。

1）親の養育態度では場所，状況を設定した7項目について親の態度を三つの選択肢から選んでもらった。その結果，性別・年齢別で有意差が認められたのは公園に遊びに行くとき，道を歩くときの2項目で，女児，年少児に安全に対する親の配慮がより強く仏われていた。

2）子どもの性格・行動など14項目について親と幼稚園の担任にそれぞれ3段階に評価してもらい事故やけがが多いと思われている子どもとの関連をみた。事故傾向がある子は親の行動評価では精神・情緒の発達が未熟で運動機能がよく活動的なタイプ，担任は運動機能・活動性は普通だが精神・情緒の発達が未熟なタイプに多かった。即ち精神・情緒の発達と運動機能・活動性の関係が事故やけがの発生に関連があるといえる。

見出し語：事故，安全行動，養育態度

Study on the Actual Condition of Present Children's Lives
— The Way of Bringing up Infant by the Parents and Infant's safety behavior —

Taneaki TAKAHASHI, Susumu SUNAGA, Sachiko SAITO
Michiko HOSHI, Reiko YUKAWA, Shuuji KAWASHIMA,
Chizuko JYOKOU, Hidetoshi HAGIWARA

We made a survey by the questionnaire about the way of bringing up infants by the parents and accident-injury, infant's character-behavior. The subjects of investigation were 265 mothers and kindergarten teachers in two private kindergartens (Tokyo and Yokohama).

1. Concerning the way of bringing up, the parents could select one item in three optinations about the seven items by the place and situation. As the result, we could recognize statistically significant items to go the park and walk along the road in sex and by age, we thought it resulted to consider the youth.

2. We asked to the questions forteen items, trid to survey the relation the child who had much troubles, by appreciations of teachers and parents. The results were as followed: According to the parent's appreciation, the child who had underdeveloped in spirit and emotion but active. On the other hand, as for the teacher, appreciated the child who had underdeveloped in spirit and emotion, ordinary motion. We felt confident to concern between the spirit-emotion in development and the motion-activity.

key word: infant's accident, safety behavior, the way of bringing up.

Ⅰ　目　的

幼児をとり巻く環境は，その変貌が著しい。その変貌しつつある生活環境の中で，幼児の不慮の事故やそれに伴うケガは一向に減る気配がなく，交通事故や水による事故に至っては，正に深刻とも言える状況になっている[1)2)]。

前年度の研究では母親の安全認識度について調査を行ないその実態を明らかにしたが，今年度はさらに研究を進め，①親の養育態度と事故の関連，②子どもの性格行動特徴と事故がどのように関わっているかについて明らかにする。

Ⅱ　方　法

1.　親の安全認識度調査：昨年度と同じく子どもの日常生活を想定した場面を絵・写真で示し，潜在的危険度に関する質問と過去1年間の事故有無などを調査。

2.　親の養育態度：「公園に遊びにいく時」「友達と遊ぶ時」「道路を一緒に歩く時」など7場面について親の態度を質問紙により調査。

3.　子どもの性格行動特性の評価：「事故やケガの多少」「体力」「運動能力」「落ち着き」「友達と仲よく遊ぶ」など14項目を親と幼稚園の担任が同一の子どもについてそれぞれ3段階に評価。

上記の3種の質問紙を幼稚園を通して配布，回収した。対象は都内私立A幼稚園と横浜市私立B幼稚園の4歳から6歳までの園児265名である。調査時期は1990年1～2月であった。

Ⅲ　結果および考察

1.　親の安全認識度について

昨年度と同じ項目で親の安全認識度と事故の実態などを調査した。そのうち以下に分析を行なう事故頻発傾向に関連する項目「過去1年間に事故や子ども自身の不注意で負傷し，医師の手当を必要としたことがあるか」では，265例中39例（14.7%）にケガの経験があった。ケガの回数はこのうち1回が32例（82.1%），2回が6例（15.4%），3回が1例（2.6%）であった。昨年度は291例中36例（11.6%）にケガがあり，うち1回は33例（91.6%），2回が1例（2.8%）であったので，今年の方がやや多くなっている。

その他の項目については昨年度調査結果[3)]とほぼ同じ傾向であったので結果を割愛する。

2.　親の養育態度と幼児の事故・ケガの関係

表1に示すように，公園にいく時，幼稚園にいる時，道路を一緒に歩く時などの場所を設定した場合や，おもちゃを与える時，友達と遊ぶ時など，状況を設定した場合などに，親がそれぞれどのように扱うかを各場面3つの中から選んでもらった。

1）男女別

「公園などに遊びに行く時」において「親がついていく」が男児より女児の親に，「危なくないように注意して出す」「特に心配していない」が逆に女児よりも男児の親に多く，親の養育態度で0.5%水準の有意差が認められる。この結果から，公園などで遊ばせる場合，女児が誘拐，いたずらなどの被害者になる危険性が高いためか，男児に比べて「親がついて行く」などの監視の目を行き届かせていることが分かる。この他「道路を一緒に歩く時」において，「必ず手をつなぐ」が女児が多く，「危ないところだけ手をつなぐ」「自由に歩かせる」が男児が多くなっている。これは女児に対して過保護に見られること，男児の方が女児より，活動量が多く，一時でも目を離せない状況にあることなどを示している。性別では以上の他に差は見い出されていない。

2）年齢別

年齢別においても「公園などに遊びに行く時」において，「親がついていく」が4歳の親に1番多く，次に5歳6歳と年長になるにしたがって少なくなっており，一方「危なくないように注意して出す」「特に心配していない」は，年長になるに従って多くなっており，0.5%水準の有意差が認められる。この結果から，当然のこととも言えるが，年少になればなるほど，親が直接公園に連れていくのが多く，年長になれば，直接ともなわず，口で注意するのみになっている。この他「道路を一緒に歩く時」において「必ず手をつなぐ」が年少児程多くなり「危ないところだけ手をつなぐ」「自由に一人で歩かせる」が年長になる程多くなっていて，1%水準の有意差が認められる。この結果も，年少児ほど，親が安全面で気にかけているということがよく分かる。年齢差でも以上の他には差は見出されていない。

3）親の評価による事故やケガの多い児少ない児別

「公園などに遊びにいく時」において「危なくないように注意して出す」が事故やケガのほとんどないに比べ，事故やケガが多い児の親に多く，5%水準の有意差が認められている。この結果から親がついていかないから事故やケガが多いのは当然であるが，注意したから事故やケガが多くなったとはあまり考えられず，それとは反対に，児自体が事故やケガを起こしやすいため，親が注意

表1　親の養育態度

		性別		有意差	年齢別			有意差	事故やケガ			有意差
		男児	女児		4歳	5歳	6歳		なし	普通	多い	
	例数	143	122		73	112	80		111	139	15	
1. 公園などに遊びにいくとき	親がついていく	33.6	58.2	*	68.5	43.8	25.0	*	56.8	35.3	46.7	*
	危なくないように注意して出す	62.9	41.0	*	31.5	53.6	71.3	*	40.5	62.6	53.3	
	特に心配していない	3.5	0.8	*	0.0	2.7	3.8	*	2.7	2.2	0.0	
2. おもちゃを新しく与えるとき	安全かどうか確かめてから与える	30.1	33.6		35.6	28.6	32.5		27.9	35.3	26.7	
	安全に遊べるかどうか見ている	52.4	48.4	—	52.1	50.0	50.0	—	47.7	51.1	66.7	—
	特に考えない	17.5	15.6		12.3	19.6	16.3		22.5	12.9	6.7	
3. 友達と遊ぶとき	乱暴な子とは遊ばせない	2.1	2.5		2.7	1.8	2.5		2.7	2.2	0.0	
	危険な遊びをしないように注意する	86.0	91.8	—	91.8	89.3	85.0	—	89.2	87.1	100.0	—
	特に何も言わない	11.9	5.7		5.5	8.9	12.5		8.1	10.8	0.0	
4. 道路を一緒に歩くとき	必ず手をつなぐ	53.8	68.0		75.3	59.9	47.5	*	66.7	55.4	60.0	
	危ない所だけ手をつなぐ	42.0	30.3	*	24.7	38.4	45.0	*	30.6	41.0	40.0	—
	自由に一人で歩かせる	4.2	1.6		0.0	1.8	7.5		2.7	3.6	0.0	
5. 幼稚園にいっているとき	危ないことをしていないか気がかり	10.5	6.6		9.6	9.8	6.3		7.2	7.9	26.7	
	何をしているか気がかり	25.9	24.6	—	35.6	24.1	17.5	—	25.2	25.9	20.0	—
	特に気にならない	62.2	67.2		52.1	65.2	75.0		66.7	64.0	53.3	
6. 子どもの食べるものについて	親が与えるものだけ食べさせる	68.5	69.7		67.1	67.0	73.8		69.4	68.3	73.3	
	欲しがるものだけを与える	26.6	27.0	—	31.5	27.7	21.3	—	27.9	26.6	20.2	—
	買い食いなど子どもの自由にさせる	0.7	0.0		0.0	0.0	1.3		0.0	0.7	0.0	
7. ちょっとした傷をしたとき	念のため医者にみせる	4.9	8.2		6.8	7.1	5.0		8.1	5.0	6.7	
	母親が手当する	92.3	87.7	—	89.0	92.9	87.5	—	89.2	90.6	93.3	—
	放っておく	2.8	4.1		4.1	0.0	7.5		2.7	4.3	0.0	

を喚起することが多いのではないかと考えられる。事故やケガの多少についてこれ以外の差は見出せなかった。

3, 性格行動評価と事故頻発傾向

子どもの性格行動特性（以下行動特性と略す）と事故頻発傾向の関連をみるに当たり，評価の信頼性を見極めるために，同一対象児についてその親と幼稚園の担任にそれぞれ同じ項目で行動評価をしてもらった。評価項目は14項目である。

表2は親と園がそれぞれ評価した「事故やケガがほとんどない一多い」と，行動特性の評価をクロスさせたものである。まず「事故やケガが多い」としたのは親は15例，園は12例であったが，各サンプルの一致は1例もなかった。親と園とは全く別の子どもを事故が多いと評価したのである。

行動特性との関連では表のごとくそれぞれいくつかの項目で有意差が認められ，両者共通して1％水準で差があったのは「落ち着いている一衝動的」「気持ちが安定している一興奮しやすい」の2項目である。その他の顕著な差は園に多く認められ，「よくけんかする」「乱暴である」「人の話を聞かない」と園に評価された子どもが事故やケガが多いとされ，0.5％水準で有意差があった。

以上のように親と園では評価が異なり，それぞれの項目では事故の起こしやすい子どもの特徴は推察できるが個々の子どもの全体像としては理解し難い。そこで今回の調査で得られた数値の「事故頻発傾向」と児の「性格行動特性」のスケールを総合的に分析することを試みた。

まず事故頻発傾向児とは何かであるが，本調査では次の3グループとした。

① 親の評価による「事故やケガが多い」　15例

② 園（担任）の評価による「事故やケガが多い」　12例

③ 過去1年間に医師の手当を受けた事故にあった　39例

実際に事故にあい，ケガをした経験の明らかなものは

表2　行動評価と事故傾向

	親の評価				χ^2 検定	園の評価				χ^2 検定
	全体	事故やケガがほとんどない	ふつう	事故やケガが多い		全体	事故やケガがほとんどない	ふつう	事故やケガが多い	
全　体	265	111	139	15		265	27	226	12	
体力がある，活動的	102	39.6	36.7	46.7		57	14.8	20.8	50.0	
ふつう	155	56.8	61.2	46.7	—	196	85.2	74.3	41.7	—
体力がない，不活発	8	3.6	2.2	6.7		12	-	4.9	8.3	
運動能力が優れている	46	18.9	15.8	20.0		38	3.7	14.6	33.3	
ふつう	189	67.6	74.8	66.7	—	202	96.3	75.4	50.0	*
運動能力が劣る	30	13.5	9.4	13.3		25	-	10.2	16.7	
動作がきびん	58	22.5	20.9	26.7		43	11.1	15.5	41.7	
ふつう	162	58.6	62.6	66.7	—	165	77.8	61.1	50.0	—
緩慢，のんびり	45	18.9	16.5	6.7		57	11.1	23.5	8.3	
物事に慎重	76	35.1	23.0	33.3		46	18.5	17.3	16.7	
ふつう	159	55.9	65.5	40.0	—	195	70.4	75.2	50.0	*
物事にがむしゃら	30	9.0	11.5	26.7		24	11.1	7.5	33.3	
落ち着いている	33	21.6	6.5	-	*	30	29.6	9.7	-	*
ふつう	193	67.6	77.7	66.7	*	208	59.3	81.4	66.7	*
衝動的	39	10.8	15.8	33.3		27	11.1	8.8	33.3	
言われたことに従う	77	36.9	22.3	33.3		74	48.1	27.0	-	*
ふつう	170	55.0	71.2	66.7	—	182	51.9	69.9	83.3	*
言われたことを守らない	18	8.1	6.5	-		9	-	3.1	16.7	
注意力がある	56	30.6	14.4	13.3		42	25.9	15.5	-	
ふつう	181	61.3	73.4	73.3	*	203	70.4	77.0	83.3	—
注意力がない	28	8.1	12.2	13.3		20	3.7	7.5	16.7	
年齢よりしっかり	60	22.5	22.3	26.7		70	48.1	24.3	16.7	
ふつう	176	66.7	66.2	66.7	—	165	48.1	63.3	75.0	—
年齢にくらべて幼稚	29	10.8	11.5	6.7		30	3.7	12.4	8.3	
気持ちが安定している	45	27.0	8.6	20.0	*	32	22.2	10.6	16.7	*
ふつう	186	62.2	78.4	53.3	*	215	74.1	83.6	50.0	*
興奮しやすい	34	10.8	12.9	26.7		18	3.7	5.8	33.3	
手先が器用	103	45.0	32.4	53.3		84	37.0	32.3	8.3	
ふつう	142	48.6	59.0	40.0	—	150	51.9	55.8	83.3	—
手先が不器用	20	6.3	8.6	6.7		31	11.1	11.9	8.3	
なかよく遊ぶ	126	55.0	41.7	46.7		79	63.0	27.4	-	*
ふつう	132	43.2	55.4	46.7	—	175	25.9	70.4	75.0	*
よくけんかする	7	1.8	2.9	6.7		11	11.1	2.2	25.0	*
おとなしい	45	22.5	12.9	13.3		41	14.8	16.4	-	*
ふつう	208	73.0	82.0	86.7	—	215	81.5	81.9	66.7	*
乱暴である	12	4.5	5.0	-		9	3.7	1.8	33.3	*
人の話をよく聞く	87	43.2	23.7	40.0		78	59.3	27.0	8.3	*
ふつう	163	52.3	69.8	53.3	*	170	37.0	66.8	75.0	*
人の話を聞かない	15	4.5	6.5	6.7		17	3.7	6.2	16.7	*

③の39例であるが，このうち①と一致しているのは9例（23.1％），②との一致は1例（2.5％）で，残る29例（74.4％）は過去1年間に医師の手当を受けた事故を経験しているが，親にも園（担任）にも「事故やケガが多い」という評価は得ていない。過去1年間にケガで医師の手当を受けたのは1回のみが32例（82.1％）であるので，必ずしも事故が多いとは言えないであろう。そこで，日常生活をみている親と園（担任）の評価が参考になるのであるが，前述の通り①親と②園（担任）の一致は1例もみられなかった。

このように事故頻発傾向（以下事故傾向と略す）児は評価する側によって著しく異なる。そこで各評価項目の事故傾向に対する関与の仕方の違いを検証するため，林式数量化Ⅱ類の理論を用い，表3のように分析を試みた。表2の②③において高い判別的中率が得られ，特に②の園による事故傾向と行動評価では97.4％と高く，担任はある一定の行動特性を持った子どもが事故を起こしやすいという概念ができており，園児をパターン化して評価したことが伺える。これに対して①の親による事故傾向と行動評価では判別的中率は55.6％と低く，一人一人の親が事故が多いとした子どものタイプは一定していないようである。しかし，③の過去一年間の事故有無と親の行動評価の判別的中率は84.6％あり，実際に事故のあった子どものタイプの検討が必要である。

親と園の評価の違いを①②のカテゴリースコアのレンジ順位でみると，親は1位「なかよく遊ぶ－よくけんかする」0.4339，2位「落ち着いている－衝動的」0.2968となっており，園（担任）の場合1位「言われたことにしたがう－言われたことを守らない」2.1765，2位「注意力がある－ない」0.9480と，それぞれ事故傾向に関与の高い項目が異なっている。

4. クラスター化による子どものタイプと事故傾向

性格行動特性の似た子どもは事故傾向も似ているであろうという仮説のもとに，表3の各組み合わせごとに子どもを性格行動特性のタイプ別に分け事故傾向との関係を見た。

まず数量化Ⅱ類の判別的中率の97.4％と高かった「園（担任）が事故やケガが多いと答えている子どものタイプ」について分析する。分析方法はタイプの似た子ども同士を同じグループにするために，林式数量化Ⅲ類によりⅠ～Ⅲ軸のサンプルスコアを算出し，その3項目によってサンプルのクラスター化を行なった。図1のとおりⅠ軸は精神・情緒＜発達・安定－未熟＞，Ⅱ軸は活動性＜活動的－非活動的＞が読み取れた。（Ⅲ軸は寄与率が6.6と低い）Ⅰ～Ⅲ軸を合わせた個有値寄与率は30.0％であった。クラスターを4グループに分け行動評価項目のクロス集計を行なった（表4）。表4及び各グループ別サンプルスコア平均点を参考にグループの特性を以下のように判別した。

第1グループ　活動性（－）　情緒（±）
第2グループ　活動性（±）　情緒（－）
第3グループ　活動性（±）　情緒（＋）
第4グループ　活動性（＋）　情緒（±）

このうち園の評価による事故傾向児12例は，活動性（±）情緒（－）の第2グループ8例（66.7％），活動性（＋）情緒（±）の第4グループに3例（25.0），活動性（－）情緒（±）の第1グループには1例（7.3％）が分類された。情緒だけでみてみると（－）の第2グループは57例中8例（15.7％），（＋）（±）のグループは計192例中4例（2.1％）と（－）グループに事故傾向児が1％水準で有意に多い。しかし活動性だけで見ると（＋）（－）間で有意な差はなかった。すなわち「情緒の未熟性」が園からみた事故傾向と言える。そして，園からみて安全性の高いのは事故傾向児0の活動性（±）情緒（＋）の第3グループと言える。

同様にして表3の残る3組の分析を行ないすべてのタイプに事故傾向児がどのように分布したのか，表5に示した。％は各グループ内で事故傾向児の占める割合であ

表3　林式数量化Ⅱ類　事故傾向と行動評価の分析

目的変数	説明変数	判別的中点	判別的中率	相関比
①親による事故頻発傾向	親による行動評価	0.015	55.6％	0.4380
②園による事故頻発傾向	園による行動評価	－0.284	97.4％	0.9274
③過去1年間に医師の手当を受けた事故の有無	親による行動評価	0.146	84.6％	0.4554
④過去1年間に医師の手当を受けた事故の有無	園による行動評価	0.015	67.5％	0.3154

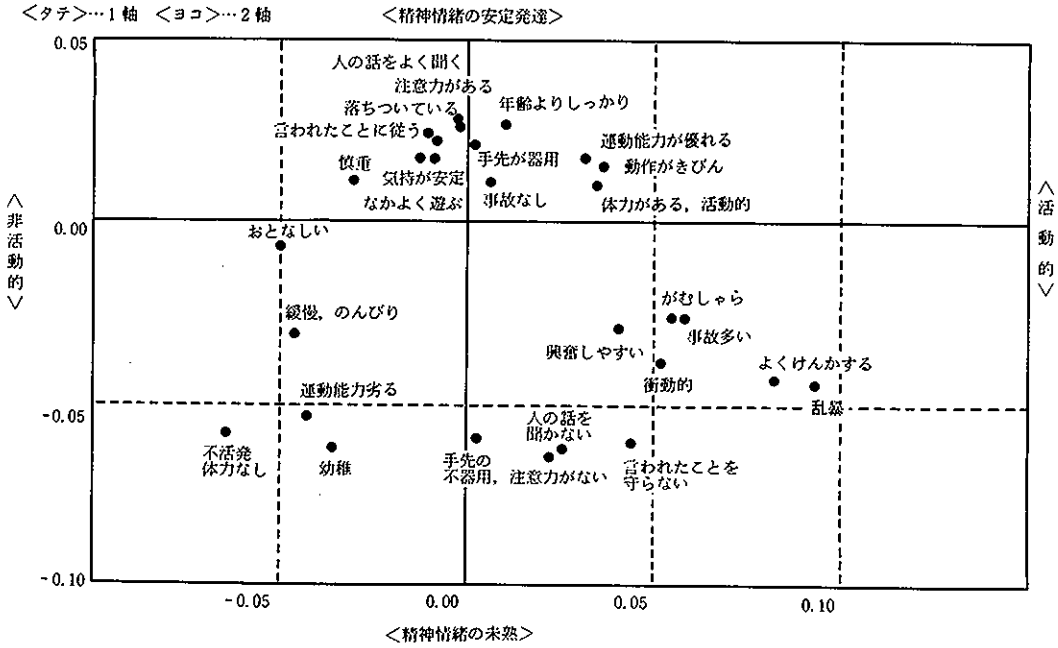

図1　園（担任）による行動評価<林式数量化Ⅲ類>カテゴリースコア2次元グラフ

る。

表5右上の「親が事故傾向ありとした子どものタイプ」からみると，事故傾向児15例は活動性（＋）情緒（－）のグループに9例（60.0%），活動性（－）情緒（±）に6例（40.0%）が分類された。園と同様，情緒（－）グループに事故傾向児が1%水準で有意に多く，活動性においても（＋）（－）間で有意差が認められなかった。すなわち親からみても「情緒の未熟性」が事故傾向と言える。安全性の高いグループは活動性（±）情緒（＋）と活動性（－）情緒（－）のグループで，前者のみ園と共通していた。

表5下段は過去1年間に事故のあった子どもの特性を園と親それぞれがどう見ているかである。

まず左下「園の評価と事故経験児」を見ると，情緒では（＋）グループ計30例，（－）グループに計9例と（＋）の方に事故経験児が集まっているが，グループ間の有意差はない。活動性では（＋）グループに計21例で，（±）の15例（－）の3例に比べて5%水準で有意に事故経験児が多い。表上の2つ「親と園の評価による事故傾向」で安全性の高かった活動性（±）情緒（＋）グループにも事故経験児が分類されたのが特徴である。園からみると，「活動性の高い」子どもに事故が多く起こっており，安全性の高かったのは活動性（－）情緒（±）であった。

表5右下の「親の評価と事故経験児」で見ると，まず情緒では，情緒（－）グループに19例（20.2%）と事故経験児の割合が高いが，情緒（＋）グループでも活動性（＋）に13例，（－）に7例と計20例（11.7%）の事故経験児が分類され有意差がない。また活動性においても，（＋）が22例（28.2%），（－）が17例（32.7%）と有意差がない。つまり，情緒の＋－に関わらず親から見て活動性が普通以上と以下の子どもが事故にあっている。また親から見て安全性の高いグループは活動性（±）情緒（＋）と上2表と同様であった。

以上の結果から「情緒発達の未熟性」と「活動性の高低」が子どもの事故やケガの発生に，2次元的に関与していることが明らかとなった。すなわち，園と親はいづれも情緒の未熟性を事故傾向と捉えていたが，過去1年間の事故によるケガの経験の有無で見ると，情緒より活動性の関与が高く，園からみて活動性の高いもの，親から見て活動性の高いものと低いものに事故経験児が分類された。

そして安全性の高いのは活動性が普通で，情緒の安定しているグループであることは4つの分析結果中3つで共通していた。ところが園から見た場合この安全であるはずの同じ特徴を持つグループで実際の事故経験が認められた。このことは事故予防の難しさを如実にあらわし

表4　園（担任）の行動評価による児のタイプ分け

	全体		活動－情緒±	活動±情緒－	活動±情緒＋	活動＋情緒±
全　体	265	%	45	51	79	68
事故やケガがほとんどない	27	10.2	-	11.8	22.8	4.4
ふつう	226	85.3	97.8	72.5	77.2	91.2
事故やケガが多い	12	4.5	2.2	15.7	-	4.4
体力がある，活動的	57	21.5	-	27.5	1.3	61.8
ふつう	196	74.0	75.6	70.6	98.7	38.2
体力がない，不活発	12.	4.5	24.4	2.0	-	-
運動能力が優れている	38	14.3	-	13.7	2.5	42.6
ふつう	202	76.2	60.0	74.5	96.2	57.4
運動能力が劣る	25	9.4	40.0	11.8	1.3	-
動作がきびん	43	16.2	-	15.7	2.5	48.5
ふつう	165	62.3	26.7	70.6	78.5	48.5
緩慢，のんびり	57	21.5	73.3	13.7	19.0	2.9
物事に慎重	46	17.4	17.8	3.9	43.0	2.9
ふつう	195	73.6	82.2	62.7	54.4	89.7
物事にがむしゃら	24	9.1	-	33.3	2.5	7.4
手先が器用	84	31.7	6.7	9.8	46.8	57.4
ふつう	150	56.6	71.1	51.0	51.9	42.6
手先が不器用	31	11.7	22.2	39.2	1.3	-
なかよく遊ぶ	79	29.8	13.3	7.8	55.7	36.8
ふつう	175	66.0	86.7	72.5	43.0	63.2
よくけんかする	11	4.2	-	19.6	1.3	-
おとなしい	41	15.5	40.0	2.0	27.8	-
ふつう	215	81.1	60.0	80.4	72.2	100.0
乱暴である	9	3.4	-	17.6	-	-
落ち着いている	30	11.3	2.2	-	27.8	10.3
ふつう	208	78.5	97.8	51.0	70.9	88.2
衝動的	27	10.2	-	49.0	1.3	1.5
言われたことに従う	74	27.9	9.9	2.0	58.2	33.8
ふつう	182	68.7	91.9	80.4	41.8	66.2
言われたことを守らない	9	3.4	-	17.6	-	-
注意力がある	42	15.8	2.2	-	30.4	25.0
ふつう	203	76.6	88.9	68.6	69.6	76.0
注意力がない	20	7.5	8.9	31.4	-	-
年齢よりしっかり	70	26.4	-	2.0	32.9	63.2
ふつう	165	62.3	55.6	78.4	67.1	36.8
年齢にくらべて幼稚	30	11.3	44.4	19.6	-	-
気持ちが安定している	32	12.1	2.2	2.0	26.6	13.2
ふつう	215	81.1	97.8	68.6	70.9	85.3
興奮しやすい	18	6.8	-	29.4	2.5	1.5
人の話をよく聞く	78	29.4	-	-	58.2	47.1
ふつう	170	64.2	93.3	74.5	41.8	51.5
人の話を聞かない	17	6.4	6.7	25.5	-	1.5

表5　グループ別事故傾向児の割合

上段　事故傾向児
下段　グループ人数（%）

			園の行動評価				親の行動評価			
			情緒				情緒			
			+	±	−	計	+	±	−	計
行動評価による事故傾向児	活動性	+	−	3/68 (4.4)	−	3/68 (4.4)	−	−	9/94 (9.5)	9/94 (9.6)
		±	0/79 (0.0)	−	8/51 (15.7)	8/130 (6.2)	0/44 (0.0)	−	−	0/44 (0.0)
		−	−	1/45 (2.2)	−	1/45 (2.2)	−	6/85 (7.1)	0/28 (0.0)	6/113 (5.3)
		計	0/79 (0.0)	4/113 (3.5)	8/51 (15.7)	12/265 (4.5)	0/44 (0.0)	6/85 (7.1)	9/122 (7.3)	15/265 (5.7)
過去一年間の事故によるケガの経験児	活動性	+	15/76 (19.7)	−	6/44 (13.6)	21/120 (17.5)	13/26 (50.0)	−	9/52 (17.3)	22/78 (28.2)
		±	15/75 (20.0)	−	−	15/75 (20.0)	0/135 (0.0)	−	−	0/135 (0.0)
		−	−	0/58 (0.0)	3/12 (25.0)	3/70 (4.3)	7/10 (70.0)	−	10/42 (23.8)	17/52 (32.7)
		計	30/151 (19.9)	0/58 (0.0)	9/56 (16.1)	39/265 (14.7)	20/171 (11.7)	−	19/94 (20.2)	39/265 (14.7)

ているものである。当然のことながら，事故発生の可能性はすべてのタイプのこどもにあるということである。従って，安全性の高いと思われるタイプも含めて，それぞれのタイプ別に適した安全指導・安全管理が必要である。そのためには本報告で示したように特性の似ている子どもをクラスタリングによりグループ分けする手法を用いるのは一考に値すると思われる。

V. 結　論

1）親の養育態度では「公園に遊びにいく時」「道路を歩く時」において有意差が認められ，女児，年少児に対して親の配慮がより強く払われていた。

2）子どもの性格行動評価と事故傾向の関連では，事故傾向のある子どもは親の行動評価では「精神・情緒の発達が未熟で，運動機能がよく活発なタイプ」幼稚園の担任は「運動機能，活動性は普通だが，精神・情緒の発達が未熟なタイプ」に多かった。また事故経験児は園からみて「活動性の高いタイプ」親からみて「活動性が普通より高いタイプと低いタイプ」に多かった。すなわち，精神・情緒の発達と運動機能・活動性の関係が事故やケガの発生に関連があると言える。今後この関連を事例研究，行動観察により解明していきたい。さらに，事故の種類別と事故発生時の状況別に分析していく必要がある。

文　献

1）厚生省児童家庭局母子衛生課監修：母子衛生の主なる統計，(財)母子衛生研究会，1989.

2）総務庁青少年対策本部編：青少年白書（平成元年度版），大蔵省印刷局，1990.

3）高橋種昭，他：現代児童の生活実態に関する研究―乳幼児の事故と安全教育―，日本総合愛育研究所紀要第25集，53～61頁，1989